

環境科学部

環境生態学科のこの一年

丸尾 雅啓

環境生態学科長

学生の動向

2017年4月には、31名の新生を迎えることができた。うち1名は久しぶりの留学生であり、日本語を学びながら、一生懸命勉学に励んでいる。また本年度は、初の全国枠特別選抜（推薦C）による入学者3名を迎えた。それぞれの個性を生かして、これから活躍してくれることを期待している。2年生、3年生はそれぞれ29名、31名が在籍している。2018年3月に4年生以上35名のうち、28名が卒業した。休学者は1名である。

同じく3月には本学科の3回生4名が、人間学科目「国際環境マネジメントⅠ・Ⅱ」に丸尾ほか教員3名とともに参加した（全体の参加者は12名）。授業は2月27日～3月9日にタイ東北部ウドンタニ市にあるウドンタニ・ラチャパット大学で実施された。詳細は原田准教授の書いた本学部報の記事をお読みいただきたい。学生たちがタイの大学生（同じく環境科学科の同年代）と英語を介して積極的に交流、意見交換し、各々の視点、観点の違いを超えて環境問題についての意見をまとめてゆく様子は、参加した教員として心強く感じられた。SNSでの交流も続いており、国際的な視点で今後の学習を深めていってほしい。

就職状況については近年の求人の多さを反映し、1名を除いて年度末までに進路が確定した。就職者は20名、大学院進学者は7名（うち本学大学院進学者5名）であった。本学の卒業生も20期目となり、社会で活躍する先輩たちが会社説明に訪れたり、就職活動中に企業の情報あるいは貴重なアドバイスをくれたりという機会が増えてきた。今年も11期の卒業生が学科を訪問し、企業説明会を開いてくれた。次年度の4月にも別の会社に就職したばかりの卒業生（19期生）から同様の説明会開催の連絡を受けており、嬉しいことである。たとえ特別な用事がなくとも、卒業生が学科教員の部屋を訪れてくれることが多い本学科にとって、卒業生がもたらしてくれる様々な近況報告、そして元気そうな（時には元気がなさそうなこともあるが）面々の顔は、教員のモチベーションを高めてくれる貴重な財産となっていると感じる。

教員の動向

本年度4月に、新任の工藤慎治助教が着任し、

教員定数が満たされた。分野的にも、水圏、地圏、大気圏の研究者を迎えることができたことは大変ありがたく、学生の研究室選択も幅ができた。また、細井（田辺）祥子准教授が、長期在外研修にてマレーシアに2017年6月から2018年3月まで、サンゴの研究のために滞在された。研究成果と今後の展開を伺うのが楽しみである。

学科の動向

本年度の優秀教職員表彰の対象者として、小泉尚嗣教授が選出され、先日表彰を受けた。表彰の理由は、「マスコミ出演、そして防災講習会の開催等により県民の防災意識向上に貢献し、本学の名誉を高めた」ことである。ややもすればマスコミへの露出が少なくなりがちな本学科の研究内容であるが、地震国日本に住むのに欠かせない情報提供による県民への貢献が大きく評価されたもので嬉しいことである。今後も折に触れ各教員が県民へ貢献できる機会を設けたい。

2017年12月15日には浦部美佐子教授の主催による、サント・トマス大（UST、フィリピン・マニラ）とのジョイントシンポジウム（The 3rd UST-USP Joint Symposium）が開催された。環境科学に関する様々な研究について、口頭11演題、ポスター19演題の発表があった。USTからは15名が来日し、本学の研究者・学生たちと交流した。なおThe 2nd Joint Symposium（2017年2月28日）は、昨年度実施の「国際環境マネジメント」をUSTの受入によりフィリピン・マニラで開催したときに現地でも同時開催されており、本学科からも浦部教授と私が参加、講演を行った。「国際環境マネジメント」に参加していた学生たちは、このときのUSTのメンバーと再会し、親睦を深めることができた。今後のさらなる交流の発展が楽しみである。

カリキュラム面では1年生前期の「人間探求学」における「教育ディベート」が10年目を迎え、定着した感がある。論題にはその時にホットな環境に関する課題を選んでいるのだが、10年前には新鮮であったものがすでに結論が出ていたり、まったく異なる議論に展開されていたりして面白い。一方で、新たな論題を試行すると意外にも議論が複雑で、かみ合わない場合があり、半年間では内容を十分に消化しきれない場合もよく見られるように感じる。後期に設けている「環境生態学基礎演習」とのリンクも有効かもしれない。できるものなら2年前の永淵学科長の同欄にあるように、単発で終わることなく4年次まで議論の機会を設けることで、続けて成長する機会をつくることができると思う。